

村 長	副村長	課 長	係 長	課 員	担 当

報 告 書

項 目 関屋・樟地区 「みらいトーク！」 実施報告書

日 時 令和8年7月13日（月）18時30分～20時00分

場 所 関屋集会所

事 務 局 総務企画課長、企画係長、穴戸、大内、佐藤（路）

出 席 者 4名

1 目的

令和9年度から始まる第6次総合振興計画の策定に向け、関屋・樟地区の現状や将来への不安、残したいもの、10年後に向けて必要な取組等について意見を聴取するため、関屋・樟地区「みらいトーク！」を実施した。

2 実施概要

はじめに、村から第6次総合振興計画の策定趣旨や計画骨子の考え方について説明した。その後、参加者及び村職員が自己紹介を行い、地区との関わりや日頃感じていることを共有した。

意見交換では、関屋・樟地区のビジョンマップを活用しながら、残したいもの、大切にしたいもの、心配なこと、今後あったらよいものなどについて話し合った。また、付箋を用いて意見を出し合い、地図上の場所や地区全体の課題・希望と結び付けながら整理した。

3 主な意見

（１）人口減少と地域活動・祭りの継続

子どもや若い世代が減少し、行政区の役員、農業関係の役員、祭りなどを担う人が少なくなっているとの意見が出された。子どもが山車を引いて各世帯を回っていた行事も、子どもの減少により、従来の形での実施が難しくなっている。

また、子どもが村外へ出た後に戻らない世帯や、将来、住む人がいなくなると見込まれる家もあり、空き家の増加や高齢になってからの除雪に対する不安も共有された。

祭りや地域活動を残していくためには、規模や実施方法を見直しながら、現在の人数でも無理なく続けられる形を考える必要がある。

（２）農業の担い手と地域の仕事

地区では農業を中心に生活してきた世帯が多い一方、農業を継ぐ若い世代や、農地を耕作する人が少なくなっているとの意見が出された。耕作者が減ることで、農地の管理だけでなく、農業に関係する組織や役員の維持も難しくなっている。

農業法人等に雇用される形であれば、若い人の仕事になり得るとの意見もあった。一方で、農産物の価格を生産者自身が決めにくく、農業だけで安定した生活を送ることが難しい現状も指摘された。

若い世代が村内にどのような仕事があるのか分からないとの話もあり、農業を含めた地域の仕事を見える形にするとともに、安定した雇用や収入につなげる取組が必要である。

（３）自然・暮らし・地域文化の魅力

関屋・樟地区の魅力として、静かな雪景色、自然に囲まれた環境、落ち着いた暮らしなどが挙げられた。村外から移住した参加者からは、都会化することではなく、自然の中で穏やかに暮らせる「ちょうどよい田舎」であることが評価された。

また、山菜、フキ、わさび、昆虫、川魚、釣りなど、自然と結び付いた暮らしや遊びも地域の魅力として話題になった。以前行われていた焼き物体験や演奏会、地域にいた大工や職人の技術なども、地区に残る文化や資源として挙げられた。

一方で、以前から住む人にとっては地域の良さが当たり前になり、その魅力に気付きにくいのではないかとの意見もあった。地域の暮らしを住民自身が改めて見直し、子どもや地域外の人へ伝えていくことが重要である。

(4) 森林管理・野生動物と自然体験

森林が集落に近づき、熊などの野生動物に対する不安が高まっているとの意見が出された。そのため、以前は身近だった山菜採りや川遊びなどを、安全に楽しむことが難しくなっている。

森林を適切に管理することで、見晴らしや住環境を改善し、野生動物が集落に近づきにくい環境をつくることが期待される。一方で、国有林など、地域や村だけでは対応できない場所や制度上の制約もある。

安全対策を進めながら、山菜採り、昆虫採集、川遊び、釣りなど、田舎ならではの体験を次の世代へ残していく必要がある。

(5) 買い物・移動への将来的な不安

現時点では自家用車で買い物に行ける世帯も多く、買い物について大きな不便を感じていないとの意見があった。一方で、高齢化により運転が難しくなれば、10年後には買い物や移動が大きな課題になるとの不安も示された。

地区には移動販売が来ており、商品を自宅の近くまで運んでもらえることを評価する声があった。移動販売は買い物を支えるだけでなく、自分で商品を選ぶ楽しみや、人と会う機会にもなる。

(6) 助け合いと情報共有の仕組み

高齢化が進む中で、一人では難しい作業や、短時間だけ人手を借りたい場面が増えることが考えられる。困ったときに相談すれば、手伝える人につながるような仕組みがあれば、地域で暮らす不安を減らせるとの提案があった。

助け合いを個人の善意だけに任せるのではなく、依頼する人と協力できる人をつなぐ窓口や仕組みをつくる必要がある。

また、祭りや地域活動、行政や関係団体の取組について、自ら情報を探さなければ分からないことが多いとの指摘があった。地区内だけでなく、他地区で行われている活動についても知ることができるよう、情報をまとめて

分かりやすく伝える必要がある。

(7) 対話の継続と結果の見える化

参加者からは、限られた人数の意見を聞いただけで終わるのではなく、今回出された意見を今後どのように計画や事業へつなげるのかを明確にしてほしいとの意見があった。

また、開催時間が住民の生活に合っているか、若い世代が参加しやすい方法になっているかについても見直す必要があるとの指摘があった。若者や子育て世代を含め、より幅広い住民の声を聞くため、開催時間や対話方法を工夫する必要がある。

対話を実施したこと自体を成果とするのではなく、どのような意見が出され、何を計画に反映し、次に何を行うのかを継続的に住民へ示すことが重要である。

4 総合振興計画への反映に向けた視点

- ・人口減少を踏まえた行政区役員や地域活動の持続可能な運営
- ・現在の人数でも無理なく続けられる祭り・伝統行事のあり方の検討
- ・空き家の増加や高齢世帯の除雪を見据えた早期の対応
- ・農地管理と農業関係組織を支える担い手の確保
- ・農業法人等を含めた地域内雇用と、地域の仕事の見える化
- ・自然、山菜、川、釣り、職人の技術など、地域資源の継承と活用
- ・森林管理と熊等の野生動物対策、安全に自然を楽しめる環境づくり
- ・高齢化を見据えた移動販売や移動支援の継続
- ・小さな困りごとを協力できる人につなぐ助け合いの仕組みづくり
- ・地域活動や支援制度等の情報を分かりやすく共有する仕組みづくり
- ・若い世代や子育て世代が参加しやすい対話方法の検討
- ・住民意見の反映状況と、今後の取組を継続的に伝える仕組みづくり

5 まとめ

今回の対話では、人口減少による行政区役員、祭り、農業の担い手不足、将来的な空き家や除雪、森林や野生動物、買い物・移動など、関屋・樟地区で暮らし続けるうえでの課題が共有された。

一方で、静かな雪景色、自然に囲まれた暮らし、山菜や川魚、地域の行事、住民が持つ技術など、今後も残したい地域の価値も確認された。特に、外から移住してきた人が地区の暮らしを高く評価している一方で、以前から住む人には地域の魅力が当たり前になり、十分に認識されていないのではないかとの意見が印象的であった。

今後は、地域資源の魅力を住民自身が再確認し、子どもや地域外の人へ伝えるとともに、祭り、農業、森林管理、買い物、除雪等を持続可能にする仕組みを整える必要がある。

また、住民が意見を出すだけで終わるのではなく、その意見がどのように計画や取組へ反映されたのかを示し、対話を継続することが、行政と地域がともに 10 年後の姿をつくるうえで重要である。

以上